

## 仕上げた作品を磨くことについて

オットー・サロモン 著  
横山悦生 訳

イギリスの諺に、このような表現がある。「きちんと行うことが価値ある行為である。」ここには、教師、おそらく特に現代の教師が心に留め置き、状況に即して適用することを試みるべきであるという、ひとつの真実が述べられていると思う。諸現象をそれらが実践的な生活の中に現れるものとして観察する人は、19世紀の終りが一種の神経質な落ち着きのない時代と特徴づけられることを見い出すであろう。生存のための闘争と言われるようになったような、人と人の競争の中で、誰もができるだけ早く進もうとし、できるだけ早く仕上げようとする。すべての点で、あるいは少しでも古き良き時代が私たちの時代以前において存在したかどうかは実際には重要ではない。一般的には人は多くの分野で、現在しばしば見られるよりもより丁寧に、より徹底的に、より上手に仕事をしたことは確かなことである。特に現代の手仕事による作品は、以前に手仕事において作られてきたものとの比較に耐えない。また、現在まだ多く残っている作品との比較にも耐えない。以前の手仕事だけが存在した時代、個人が働く時代においては、なによりもまず着手した仕事を上手に遂行することに注意を向けていた。しかし、現代の機械による仕事の時代では、できるだけそれを上手にやることよりも、人がやっていることをできるだけ早く仕上げることを多くの人は重視しているように思われる。アメリカの作家の表現を用いるならば、自分の仕事に十分に良心を込めない。つまり、労働者自身によって、あるいは彼の直接的な、あるいは間接的な使用者によって、生産物の質に対する最低限の要求がたてられるところでは、最低限よりも少しより良いものを生み出す代わりに、最低限の要求に対応することで満足してしまう。煉瓦工は、表面が凹凸でバラバラになりやすい石を作り、壁塗り工はその石を低品質のモルタルで組み合わせ、家の基礎を掘削する人は十分な深さまで掘らず、大工は梁を大雑把に組み合わせる。

それに加えて、組み立て自体が必要な測量もされないことが起こるならば、家屋全体がすぐによろめいて崩落することは不思議ではない。ただ大雑把にすること、また、完成させなければならないことから逃げ、できるだけ早く仕上げようとすることは、確かに仕事をするのが遅いことよりも悪い。それは個々の労働者の一定の性格的な欠点が原因であり、その出発点でもある。そのことは今度はその労働者の性格に再び影響する。なぜならば、原因と結果が容易に逆転するからである。よくない労働者はよくない仕事をするが、よくない仕事はよくない労働者をつくる。自分の行為に真面目に責任をとろうとする教育者は、確かにこの現象が実際にそうであること、そうであるに違いないことをあえて見逃さない。

よく知られているように、学校（の目的）は生活のために準備しなければならぬということしばしば語られるテーゼである。しかし、それはよく誤って理解され、解釈されている。例えばそのテーゼを以下のように理解する。実際の生活でなされているように学校でもなされなければならない。学校はできるだけ生活を真似るべきである。それがどこに行くとしても生活の軌跡を進んでいくべきである。実際の生活において、まず早く仕事をするのが重要である、スロイドの授業の際に子どもたちにペダンチックであることに慣れさせてはならない、作品の完成に多くの時間を費やすべきでない。このような意見を述べる人がいる。訓育の概念、その目的と手段を深く考えたことのない人によってそのような意見が発言される。そのように教えられた人には、実際の生活の要求である早く完成させることが重要であり、作品の完成に時間を費やすことはあまり役に立たないからである。しかし、ここには概念の混乱があるように思われる。家庭と学校が準備すべき生活、両親と教師が訓育すべき生活は、当然多くの点で現実の生活とは異なっていないわけではない。あるべき生活は、残念ながら多くの場合、訓育の導く理想を形成すべき生活ではない。訓育は高めることであって、決して低めることではない。訓育はよい能力の発達を通して個人を改善しようとし、それによって社会と人類全体を改善しようとするものである。実践の生活において出会う多くの人が、恐らく真実に厳しく従わず、十分に正直でないという事情があり、子どもたちが生活のために準備する際に、彼らが嘘や偽りに慣れるべきであるということがその理由にならないのと同じように、現在の世代が上手に仕事をするよりも早く仕事を終えさせることを考えることは、だらしのない未完成の作品で終えることに子どもたちを慣れさせる理由にはならない。その逆である。もし現在の時代精神に

欠点があるとすれば、まず第一にこの欠点の表現である現役世代の後に彼らの遺産を受け継がねばならない未来の世代に働きかけることを通して、その欠点を根絶しようとするのが教育の課題であるに違いない。もし人が今日あまり良心的でないならば、明日はもっと良心的になるように注意しなければならない。教育が発達と同義であるならば、教育はその理想を現在ではなく、未来に求めなくてはならない。もし私たち自身が悪い労働者であるならば、私たちの子どもたちをよりよくすることが私たちの義務であろう。大雑把でせわしく不完全になされた仕事を、言葉と行為を通して完全に完成したものに引き継ぐようにすることは、この仕事が遂行のためにより多くの時間を必要とするとしても、確かに時間の無駄でも細かいことにこだわることでない。この点で、もし私たちが若い人たちに実際の生活を意気を阻喪させる例としてではなく、模範として示すようにするべきである。よく知られたイギリスの作家であるラスキンの言葉を引用すると、「私たちがどれほど多く作るかが重要であるのではなく、どのように作るかが重要である。より多く作る事が重要ではなく、よりよく作る事が重要である」と私たちは生徒に説明する。

もしここで上述した見解を、教育的なスロイド教授、すなわち教育の目的のために営まれる、スロイド教授にあてはめようとするならば、フランスからデンマークを通してスウェーデンに移ってきた見解、すなわち子どもたちがスロイドをすることによってなされた作品に磨きをかけないままでよい、すなわち未完成の状態でもよいという見解に私は決して同意できないことは明らかである。すなわち、教育については「子どもが学ぶことのなかで最も取るに足らないことであっても、完成させることが重要である」と言うペスタロッチの言葉に私は同意する。それゆえ、もし教師が未完成の作品を承認するならば、教師はその教育を委ねられた子どもに対して罪を犯している。教師が半分完成しただけで満足するならば、あるいは不十分なスロイドの作品で満足するならば、それはよく仕事をするよりも早く仕事をするを重要視するという、ある意味でこの時代の神経質的な不安の兆しであろう。

しかし、もう一つ引用をするなら「人はなすべきことをする理由よりも、やりたいことをする理由を多く見つけ出すことができることが多い」というように、子どもたちによって完成された作品を子どもたちに磨かせることは必要ないだけでなく、磨くことを通してイギリス人の言う「完成した (finished)」、オランダ人の言う「すっかり終わるまで (af)」という状態にすることは作業する人にとって有害でさえあることは、表面的な見方をする人には十分に明らかであるかもしれない。そう主張する理由は確かにたくさんある。多くの人々は、サンドペーパーで磨くことは疑いなく子どもたちを道徳的、知的、肉体的な点で害を与えるとさえ主張する。もし、そのようなことが語られた場合、次のようなことは不思議ではない。子どもたちがサンドペーパーを利用していることを知っている人は怖いという気分を感じて、ある恐怖をもって自分の周囲にいる子どもを見ている。また、その人は額(ひたい)に罪を犯したような表情や呆れたような表情をする。さらに急性の肺結核の最終段階を示しているような外見をした子どもたちを見ようとする。しかし、もし実際にサンドペーパーが精神や身体にとって毒であるならば、コーヒーや紅茶や煙草と同様に、非常にゆっくりと作用する毒であると考えられる。私が知っている、尊敬すべき賢明で力量のある多くの人々は、長年の自分の日々の仕事のためには、そうした磨く作業を行う必要があるというからである。それゆえ、ここで示されたような主張を注意深く取り上げるべきだと思われる。

スロイドの授業においてサンドペーパーの利用することに対してよく聞かれる反対意見は、以下のようなものである。サンドペーパーの利用は、切る道具を正しく扱う技能の獲得を妨げる。それは子どもたちに嘘に慣れさせ、子どもたちを退屈させる。また、労働への嫌気感を生み出す。それは子どもたちを鈍くさせるような、考えることのない、機械的な遂行作業である。それは鋭い角を鈍くし、一般的に木材の全体の特徴を破壊する。それは多くの時間を取る。それは肺にとって有害で、砂や木の粒子や、さらに鋭いガラスの粒子が、磨く作業の際に肺に侵入してくる。読者はこれらの危険を、ここで示された道徳的、知的、身体的な観点で自分自身で分類できるのが一番よいと思われる。私は、それらの主張をより詳細に検討し、ここでは述べられたこれらの意見が、一方で相互に打ち消し合い、他方できちんと管理せず、よく考えないでサンドペーパーを利用する場合にはそれらの意見が意味があることを示そうと思う。

教師の側からの不完全な指導と監督の場合、サンドペーパーの利用が、子どもが切る道具に自分の最善を尽くさないという原因になることもある程度起こり得る。しかし、教育的スロイドの授業では、他の教育的教授の場合と同じように、教師が自分の仕事を適切に行い、適切な方法で監督できるよりも多くの生徒に同時に教えることはしない、という前提から出発することが避けられない。教師が事情を理解していて良心的であるならば、作品を磨くことが、切る道具の利用によって十分に役立つものを引き出すことか

ら子どもをたとえ小さな程度であっても妨げるということを、私は理解できない。第一に、以前に使用した道具を子どもが十分に使うようになるまでは作品を磨くことをさせない権利は教師にある。そのことは、場合に応じて教師が監督することができる。違いは一つの点にある。すなわち、磨く作業が無いスロイドの授業では教師は生徒に言う。「今、あなたの作業が終わりました」。磨く作業のあるスロイドの教育では教師は言う。「今から磨く作業をして、完成させなさい」。前者の場合、教師はまだ完成していないが、生徒の合格した作品を直ちに受けとるが、後者の場合、教師は審査の後に、その課題に従って、最終的に磨く作業をするための適切な大きさのサンドペーパーの切れ端を作業する生徒に与える。他の点ではよく似た状況の下で、大部分同じような手順を踏んでいるこれらの両方が、その作用についてはとても異なること、つまり前者の場合は子どもたちが道具を上手に使い、後者の場合は子どもたちが道具を上手に使うようになれないという点で、とても異なるという意見が私にはどうしても理解できない。逆に、先に述べた点で違いが生じるならば、前者のやり方よりも後者のやり方の方が全体として子どもたちはよりよく働く可能性が大きくなると、私は主張したい。なぜなら、完成されたものや比較的優美なものが作業の結果として出来上がるのを子どもたちが知っている時の方が、子どもたちの努力がかなり質の劣る作品、子どもたち自身やその身近な人たちが満足してもすぐに飽きるような作品になることをあらかじめ子どもたちにとって明らかである場合よりも、子どもたちの関心が当然より大きくなっているに違いない。さらに、切る道具の使い方を学ばないで、サンドペーパーを好むという先に強調されて述べられてきた子どもたちの努力と、退屈で多くの時間を取るというサンドペーパーを利用することへの他の多くの反対意見を比べて、どちらが妥当であるのか？すなわち、楽しく時間が早く過ぎてしまうことよりも、子どもたちが退屈でより時間がかかることを好むという一般的に有効な観察があるとは私には思えない。それゆえ、もし有能な教師が生徒たちに切る道具を可能な限り充分に使わせるならば、生徒たちにとってそのことはあらゆる点で有益であることにすぐ気付くだろう。スロイドの授業はよくない指導の下ではどんな場合でも失敗する。

完成された作品を磨くことを通して、スロイドをする人が自分の作品を他人に見せる際に、スロイドする人に正しく与えられるべき価値よりもより大きな価値を自分自身に付け加えるという意味で、虚偽がスロイドをする人に植えつけられると言われる。聞くところによれば、例えばよくできた鉢棒を他の人が褒めるときに、ナイフを使用した後、まだ残っている凹凸を磨くことで滑らかにしたことを隠し、作業全体がナイフだけでなされたような印象を、専門家でない、その作品の観察者に容易に持たせる。そうした作品を見せることを通して作業者は真理に対する罪を犯し、その結果道徳的な点で墮落するようになる。作業をすることは、生徒をよりよく発達させず、逆により悪くした。スロイドは教育に貢献せず、反対物になった。

このような理解に私は同意できない、あるいはこれらの危惧に同意できない。ある作品の完成にもつばら一つの道具、つまりナイフだけを使ったと言いながら、作品の仕上げのために他の補助手段も使ったならば、それは嘘をついたことになり、それによってハッキリした罪を犯すことになると言えることは明らかである。

これは、実際に写真を筆で修正したのにかかわらず、この肖像写真は筆で修正されていないと主張するならば、その写真家が嘘をついているのと明らかに同様である。あるいは、家具職人が表面だけより高価な材料で貼り付けたテーブルをマホガニー材だけでできている、と誰かに信じ込ませようとする場合も明らかに同様である。これが嘘であることは確かである。それに対して、もし上に述べた紳士たち、すなわち写真家や家具職人がその理由（写真家の場合は修正した理由、家具職人の場合は合板で覆う理由）を述べるなら、事実はまったく違ってくる。もし彼らが質問されたなら、疑いなく真実に従ってその手順を説明するだろう。なぜなら、彼らは少なくとも興味ある知人がその作品について知っていることを前提としてもいいからである。彼らは自分の作品の性質について嘘をつきたいというのぞみはまったく持っていないからである。銀のスプーンが銀だけで作られることはありえないことを調べた人は誰でも、そのことと同様に金時計は金だけで作られることはないし、大理石の教会は大理石だけで建てられていないということを知っている。それは嘘を言っている訳ではない。というのは、金時計が金だけで出来ていないことをよく知っている時計職人が、金時計と言うとき金だけでできているのはケースだけで、残りの部分は純粋な金でなく法律で許可された金の合金でできていることを時計職人は前提としているからである。ある著者の本について語る時、真実のみを言うために、この著者がその内容を著述し、その内容をまとめたという

意味で、その本が著者によって書かれたものであるということは強調する必要はない。それに対して著者が原稿を清書せず、紙を作らず、植字せず、印刷せず、製本しなかったことも明確には強調する必要はない。何かの説明を与えることなしに、実際とは別の方法や実際とは異なる範囲で理解されうる何かをする時、道徳的に正しくない、あるいは嘘ではないことを示すために多くの同様の例を引用することができよう。なぜならば、前に述べたことはあらゆる正直者に何も活動させないのとはほとんど同じであり、特に教育の分野では確かにそうである。子どもたちが完成させたスロイドの作品を研磨することによって生まれると考えられる同じ道徳的な危険は、すなわち前述したこととまったく同じ思考過程によってさまざまな対象において懸念される。子どもたちが何かの本を写すのを練習したとき、その子どもたち自身がその内容を書いたという理解を、直接的にか間接的に他人に伝えることがありうる。子どもたちが外国語に翻訳する時に、翻訳の作業をあまりわからない人は翻訳が文法書や辞書の助けなしに翻訳がなされているとおそらく考えるであろう。子どもたちが地理の知識を説明するとき、この子どもたちの現場でなされた独自の観察に従って書いているというイメージをもつかもしれない。こうした例は、無限にある。さらにサンドペーパーで研磨することに関して、このことが子どもたちの側からのゆがんだ説明の理由にはならないであろう。なぜなら、スロイドの作品を研磨することが虚偽への誘惑になることを極度に恐れている同じ人間が、同様にサンドペーパーの罪の目録に、サンドペーパーで研磨することが木材の性質を変え、木材の尖った角を丸くするという罪をつけ加えるからである。今、このことが正しいならば、そしてそのような熱心さと確信をもって真実を守ることに尽力する人が、実際の状態と一致していると自分で信じていることだけを言うならば、まるで研磨することが何らかの真実でないことへの特別な誘惑にはなりえないことを完全に安心して保証することができよう。なぜならば、真実の状態を調査する気がない人で、自己欺瞞を必要とする人は一人もいないからである。

しかし、このような文脈においては、サンドペーパーで磨くことはスロイドをする人が誤りを訂正し、磨くことによってサンドペーパーを使う前に使った道具で犯した間違いを隠すことを許すことになり、間違いを隠すことが道徳的でない、教育学的に擁護されないとみなされることになる。私はこれに対して問題を提起したい。もし一般的にそのなされた失敗だけでなく、その失敗を訂正することも誤りと見なされるなら、訂正することは道徳的な点で非難に値することなのであるだろうか？ 私はそうではないと思う。例えば、作家が自分の原稿を書き直したり、画家が自分の絵に満足しないときに修正することが不道徳であるとは考えられない。逆によりよいものへの道は犯した失敗や間違いを理解して改善を試みることにあると思う。最も優れた作家たちでさえ、おそらく彼らこそ最初に紙に書いたことの多くを削除して書き直す。鋸引きの技能の初心者で、誤った鋸引きの切断をした人が、それを修正することがよくないとする同じ人が、彼ら自身が書いたことについては必要な修正を行うことを問題とはしない。一方、鋸引きでなされた失敗が恥や見せしめのためにそのまま残しておくことをそれでよしとするであろう。彼らはそうした書き直しの作業の際に、内容、形式、綴り、文章の句点に関して、自分の判断だけでなく、他人の判断もまた用いるかも知れない。製図教育において、間違っただけで引かれた線や汚れを残しておくことが、図面が完成したとみなされるまでにそれらを消しゴムで消すことよりも大きな教育的な重要性があるとは私には思えない。確かにペスタロッチはまず第一に子どもたちに道徳的感情を発達させることを望んでいた。石板では間違っただけを容易に消すことができるので、ペンを使う前に石筆で書き、線を引くことを彼は勧めている。磨くことが道徳的には作用しないという見解と同じような根拠によって、木工スロイドが全体として否定される。その理由は、木工スロイドでは複数の異なった道具が順番に利用されるので、先行する道具によって生じた誤りを後に使われる道具によって隠したり、取りのぞいたりすることにあるとされる。

一連の道具（鋸、磨き鉋、平鉋、仕上げ鉋）において、前に使われた道具が材木につくった痕跡は、後の道具によって常に消される。しかし、消すことは完全に作業の一部であり、このようなやり方が作業者に道徳的に害を与えるとは私には全く理解できない。さらにいつも話はそこに戻ってゆくが、すべては、教師の個人的な影響とその教師が作業を組織し、指導し、監督するやり方による。それゆえサンドペーパーを上手に利用することが、子どもの道徳に悪い影響を与えるとは私は思わない。学校で磨くことはよくないので子どもが完成した作品を教師に隠れて磨くとか、教師が視学官に隠れて子どもに磨かせることの方が子どもの道徳により悪い影響を及ぼすと私は思う。

磨くことがいろいろな人（年取った人も若い人も）にとって退屈であるということは現実と完全に一致しているが、逆にそれを退屈でないと感じている人々も確かに存在する。好みと嗜好は無視できない、ま

たできるだけ作業が完成するまで、一つの作業を長く続けることの不愉快さは研磨作業に限ることではない。優美さに対する感覚も熱心さに対する意欲も、個人ごとに発達の程度が異なる。それゆえある人にとって必要でないとか、まったく耐えられないことが、他の人にとっては圧倒的に好きであり、それに楽しみを見出すことがありえる。その上、一般的には教師は授業の際に一人一人の子どもが楽しいと思うことや楽しくないと思うことに特別に大きな配慮をしなくてもいいと考えており、その結果常に楽しいことだけをする必要はなく、楽しくないことは避ける必要がないと考えているように私には思われる。それゆえに、子どもたちが研磨作業をせず、自分の仕事を完成させない決定的な理由として、退屈さはその原因ではない。もし退屈さが実際により広範に存在するならば、磨くことが必要だという見解に反対するための理由として、むしろ退屈さをあげることができるかもしれない。もし教師が表面を小綺麗で、体裁のいいようにすることを子どもたちに要求するならば、また子どもたちが長時間研磨作業をすることを楽しまないならば、このことが研磨作業の時間を少なくするために切る道具でもってできるだけ完成品に近いものにするように努力する理由を教師と子どもたちに与えるであろう。

次に、研磨作業が機械的で思考しない作業であるとか、研磨作業が木の性質と作品に明白にあらわれる角を破壊するという、二つの反対論について以下にのべる。二つを一緒に取り上げた方がよいのは、お互いに関連しているからである。すなわち、サンドペーパーで磨いた作品は上記の点で破壊されたものになるということであれば、注意と配慮をもって研磨作業を遂行することは実践的に有用なものにならないので、当然研磨作業は完全に機械的になりうる。それに対して、研磨作業は、作品をよくする、あるいは悪くする、どちらにも作用するので、この研磨作業を遂行する方法は、非常に重要である。今やサンドペーパーの最大の敵も、研磨された作品が鋭く見える角や美しい表面を示すことはできると主張しないであろう。確かに私はある人たちが反対意見を表明するのを聞いた。しかし、研磨されたあるいは研磨されていない同じ種類の作品を見せた時に、どの作品にサンドペーパーがかけられ、どの作品にかけられていないかを判断することを彼らに依頼した場合、研磨がよくなされている限り、彼らはそれらの違いに気づくことができなかつた。そのことは、サンドペーパーの使い方、すなわち、注意深くそれが使われたか、使われなかつたかが重要であることを示しているように思われる。したがって教師の役割は、生徒にこのことを示し、一般的に自分の作品をできるだけ良く美しいものにするのを望む生徒が、機械的な研磨を避け、スロイドの作業の研磨の部分を注意と熟考をもって遂行することに努力するように指導することである。

かなり多くの時間が研磨作業に費やされることは、言われているほどには時間がかからないにしても、例えばネースでは教師や生徒が他の道具を利用せず、サンドペーパーのみで、指示棒から机までのすべてのモデルを完成させ、それらが疑いもなくとても美しい芸術作品であると信じられてきたが、そのことは否定できないだろう。しかし、時間が短いとか長いとかは常に相対的なもので、時間が何のために利用されたかによる。確かに教育を受けている子どもは、自分の手の仕事に対して、低い水準の要求をすることに慣れさせることや、子どもがしたことすべてに対して、間接的に低い水準の要求をすることや、未完成の状態のまま作品を放置することに慣れさせることほど最悪なものはない。また、その作品の優美な外観は、たとえその作品の実践的な利用を高めず、その必要性がないとしても、良心的な労働者が拒否できない何かであるということを知るほど最悪なものはない。

次に長い時間に関して、最初のモデルの遂行にかかる時間の割合を計算することは、当然完全に間違っている。なぜなら、特に最初のモデルでは必要な研磨作業は比較的長い時間がかかるのは当然であるから。すなわち、子どもが十分に道具を知り、道具の使用において満足のゆく方法で十分な練習をするまでは、最初の段階はより研磨作業のための多くの時間が必要である。初心者がモデルシリーズを進めていくに従って、切削道具の正しい使用法についてより多くの技能を獲得するので、研磨作業に必要な時間が短くなっていく。それゆえ、鉢棒を作るための必要な時間のうち、最後の研磨作業に費やす割合は、例えば本棚や机を完成させるのに必要な研磨作業の時間の割合よりも大きくなる。したがって、同じ割合が研磨作業に必要な時間の計算の根拠にはならない。

最後に、サンドペーパーについて以前述べた、呼吸器官、特に肺への有害な影響について述べておく。私が思うに、この点について数人の医師に相談してきた。極端に述べられた危険がかなり誇張されている、というのが医師たちの意見であった。肺や特別に弱い肺が煙や埃により長い時間さらされることによって害を受けることがありうるが、そうしたことは他の原因で引き起こされることもありうる。そうしたことは十分に予想できるはずである。しかし、この点で害になりうるものすべてを子どもたちから可能な限り

避けさせるならば、最終的には子どもたちを適切なガラスの棚に入れて保護するしかない。確かなことは、学校の中でも外でも、生活では動物や野菜や鉱物から由来する埃の粒子を吸入する多くの機会がある。教室の掃除、教室や遊びの場での遊ぶ、体育での運動、埃っぽい田舎道での風の強いときの散歩、このようなことすべてや他の多くのことによって、少量の砂の粒子が重力の下方への引力に反して空気中に飛び上がり、作業者の鼻や口を通して彼らの呼吸器官に入っていくのと同程度かそれ以上に、肺の通常の活動に危険を与える。率直に言えば、私の長年にわたる観察に基づいて、一週間に合計して最大数時間の研磨作業が一人一人の子どもに起こりうる衛生的な危険について叫ばれている危険に対して、きわめて疑問を感じる。実際にサンドペーパーの利用が生命と健康にとって大きな危険、期待される危険を伴うならば、自らの職業のために毎日、毎年そのようなことを取り扱わなければならない人にこそ、まずその危険が認められるはずである。しかし、実際の状況はそうでない。統計が示しているように、大工仕事はより健全な職業と考えられる。その遂行者は平均寿命に達するか、またそれより長命である。

しかし、次のような質問を立てることができる。もし、スロイドの授業でサンドペーパーを利用することは危険も不都合もまったく伴わないだろうか？ ここで私は答える。当然それはある。われわれ人間がやっていることすべてが誘惑や危険を伴うように、もしそれが非合理的な方法や過剰になされる場合にそういうことも起こる。何かが害になりうるものが、何かと関連付けない十分な理由であるとすると、われわれ不完全な人間はすべてを避けるしかない。概して多くの人間は飲むよりも食べることによって死に至ることがある。しかしそのことは食べることをやめる十分な理由にはなりえない。読む能力が広まるにつれて、スキャンダルやエログロを扱った文学の消費者を増やし、書く能力が広まるにつれて、為替手形や約束手形の偽造者の数を増やすが、そのことが民衆教育のためのすべての活動を非難する十分な理由にはなりえない。要するに、ほとんどすべてのものは二つの面があり、ある環境のもとで何かが悪用されることはありうるが、その賢く目的にあった利用を妨げるべきではない。思うに、このことはスロイドの授業で完成された作品の研磨作業にも適用されうるであろう。確かにサンドペーパーについての詳細は、さまざまな他の教育の詳細と同様に、また全体としての学校の活動と同様にその詳細にこだわるならば、有害な誇張に導くことがありうる。しかし、賢明で有能な教師の指導の下で、彼の指示にしたがってサンドペーパーを利用することが危険でないだけでなく、より深い意味における教育的なスロイド教育の本質的な要素となるように思われる。

(1892年)